潜在危険性

火災・爆発

- 水と接触すると引火性・毒性のガスを発生する。
- 水や湿気と接触すると発火するおそれがある。
- 水と接触すると激しく又は爆発的に反応するものがある。
- 熱、火花及び火炎で発火するおそれがある。
- 消火後再び発火するおそれがある。
- 引火性の高い液体に入れて輸送されるものがある。
- 漏洩すると火災・爆発の危険がある。

健康

- 強い毒性：水と接触すると毒性ガスを発生し、吸入すると致命的となるおそれがある。
- 蒸気、物質、あるいは分解生成物の吸入や接触により、外傷や死に至るおそれがある。
- 水と接触すると腐食性の水溶液を生成するおそれがある。
- 火災によって刺激性、腐食性及び／又は毒性のガスを発生するおそれがある。
- 消火水が汚染を引き起こすおそれがある。

公共の安全

- **まず、送り状記載の応急措置照会先に電話する。送り状がない場合や応答がない場合、関連機関のデータベース等に照会する。**
- 直ちに、すべての方向に適切な距離を漏洩区域として隔離する。
- 関係者以外は近づけない。
- 風上に留まる。
- 低地から離れる。
- 密閉された場所を換気する。

保護具

- 空気呼吸器（SCBA）を着用する。
- 製造者により特に推奨された化学用保護衣を着用する（耐熱性がないおそれがある）。
- 防火服も限られた防護をするに過ぎない。漏洩時の効果はない。

避難

漏洩時

- 風下に適切な避難距離をとる。

火災時

- タンク、貨車あるいはタンク車が火災に巻き込まれた場合は、すべての方向に、適切な隔離距離と適切な初期避難距離をとる。

緊急時の措置

火災時

水又は泡消火剤を使用してはいけない（下記のようにクロロシランには泡消火剤使用可）。

小火災

- 粉末消火剤、ソーダ灰、石灰又は砂を使用する。

大火災

- 乾燥砂、粉末消火剤、ソーダ灰や石灰を用いて消火する。あるいはその場所から避難し、燃焼させる。
- **クロロシラン火災に水を用いてはいけない。AFFF－耐アルコール性中型発泡泡消火剤を使用する；クロロシラン火災には粉末消火剤、ソーダ灰、石灰を使用してはいけない。大量の水素ガスが発生し爆発するおそれがある。**
- 危険でなければ、容器を火災区域から移動する。

タンク火災あるいは車／トレーラーの積荷火災

- 可能な限り遠くから、無人ホース保持具やモニター付きノズルを用いて消火する。
- 消火後も大量の水を用いて十分に容器を冷却する。
- 容器内に水を入れてはいけない。
- 安全弁から音が発生したり、タンクが変色したときは直ちに避難する。
- 火災のタンクから常に離れる。

漏洩時

- 漏洩しても火災が発生していない場合、密閉性が高い不浸透性の保護衣を着用する。
- すべての発火源を取り除く（近傍での喫煙、火花や火炎の禁止）。
- 漏洩物に触れたり、その中を歩いたりしない。
- 危険でなければ漏れを止める。
- **漏洩物と水とを接触させてはいけない。また、容器内に水を入れてはいけない。**
- 蒸発を抑え、蒸気の拡散を防ぐために散水する。
- **クロロシランはAFFF－耐アルコール性中発泡泡消火剤を使い蒸気発生を抑える。**

少量のもれ

- 乾燥した土、乾燥砂あるいは不燃材料で覆い、さらにプラスチックシートで飛散を防止し、雨にぬれないようにする。
- 漏洩物に囲いをして、後で廃棄する；指示がなければ水を散布してはいけない。

粉末のもれ

- こぼれた粉末はプラスチックシートで覆い飛散するのを防ぎ、乾燥させておく。
- **専門家の指示がないときは漏洩物を取り除いたり廃棄してはいけない。**

応急手当

- 被災者を新鮮な空気の場所に移す。
- 救急車を呼ぶ。
- 呼吸が停止している時は人工呼吸を行う。
- **被災者が（有害）物質を飲み込んだり、吸入したときは口対口法を用いてはいけない；逆流防止のバルブがついたポケットマスクや他の適当な医療用呼吸器を用いて人工呼吸を行う。**
- 呼吸困難の時は酸素吸入を行う。
- 汚染された衣服や靴を脱がせ、隔離する。
- 漏洩物に触れたときは、直ちに皮膚から取り除く；流水で皮膚あるいは眼を最低15［20］分間洗浄する。
- 被災者を温め、安静にする。
- 医師に暴露物質名、防護のための注意を通知する。